

ナーガールジュナの諸著作

— 思想の考察と著作の分類の試み —

津 田 明 雅

1. はじめに

中観派の祖といわれる Nāgārjuna のすべての著作を俯瞰したとき、そこに何が見えるか、というのが本稿のそもそもの問題意識である。もともと、彼に帰せられる数多くの著作のうち、いずれが真作であるのかということは、ほとんどの著作で完全に解決されておらず、それどころか各校訂テキストにも改善されるべき点が多く残されている。

それにもかかわらず、このようなことを試みるのは、謎の多い彼の人物像を明かしたいという思いからである。さらに、そのためには個々の著作の解明のみならず、著作全体を見渡す視点からの解明も必要であると考えらるからである。従来の研究では、個々の著作あるいは傾向の似た 2, 3 の著作に関してはそれらが詳細に検討、あるいは比較検討されることはあっても、著作全体として見たときにどうか、ということとはあまり考慮されてこなかったように思う。もちろん、個々の著作のテキスト校訂や真偽性などの解明は最も重要な研究の一つであることに変わりない。しかしながら、現時点でそれらの成果を利用して、著作全体として言えることはないか、個々の解明と全体の考察との間の、一進一退の歩みの一つとして、今回あえて試みるものである。

本稿では、彼の著作全体を通して思想の変遷はあるのか、また興味や関心の変化はあるのかといった点に留意しながら、彼の「空の思想」についてまとめ、さらに諸著作を内容の違いから 3 つに分類することを試みた。

Nāgārjuna (ca. 150-250) の著作のうち、現時点で真作と認められるものは以下の 17 作品である¹⁾。これらの他にも『大智度論』、『十住毘婆娑論』、『方便心論』なども可能性としてあろうが、これらはここでは扱わない。

Mūlamadhyamakakārikā²⁾(以下, MK)

Śūnyatāsaptati (SS)

Vigrahavyāvartanī (Vt) * 注釈部分も含める

*Vyavahārasiddhi (Tha sñad grub pa) (VS)

Vaidalyaparakaraṇa (VP)

Pratītyasamutpādhāṛdaya (PH) * 注釈部分も含める

Yuktīśaṣṭikā (YS)

*Bodhisambhāraka 『菩提資糧論』 (BS)

Ratnāvalī (RĀ)

Suhrillekha (SL)

Mahāvānaviśīkā (MVīm)

Lokāṭīṣṭava (Ls) — Catuṣṭava (CS) の第 1

Nirauṇomyastava (Ns) — CS の第 2

Acinyastava (As) — CS の第 3

Paramārthastava (Ps) — CS の第 4

Stuṭyāṭīṣṭava (Ss)

Niruttarastava (Nt)

2. Nāgārjuna の思想

Nāgārjuna の著作には、他学派と論争するものや王への書簡、仏を称える讃歌など、多様なジャンルのものがある。しかしいずれの著作にも共通して、空の思想が何らかの形でみられる。ここではまず、そうした Nāgārjuna の「空の思想」を、先の17作品において確認してみたい。その一つの手法として、「ことばとその対象」を手がかりに、「構想作用の否定」、「縁起」、「実体（自性）の否定」をみていき、最終的に「空」の理解を試みたい。具体的には、各著作の哲学的記述を上記4つおよび「空」という計5つのカテゴリー（a. — e.）のいずれかに分類し、項目ごとに考察していく。

a. ことばとその対象——世俗の世界 われわれは「ことば」を通じて世界を見ているといっても過言ではないくらい、ことばは日常生活と切り離せないものであり、「空」の理解の上で非常に重要なキーワードである³⁾。

同じ言語社会に暮らすわれわれは、ことばが指示対象を共通に認識できると。だからこそ一つの言語社会が成り立つのである。そうした、一つのことが何を指示するかという決まりごととは言語契約⁴⁾といわれ、広い意味では言語習慣（vyavahāra）とよばれる⁵⁾。一方で、「一つのことにばに多くの意味があり、一つ一つの意味に対しても多くのことばがある」（VP 54）あるいは「[言語的] 多様性（prapañca）」（MK 帰）といわれるように、一つのことにばにいくつかの意味があり、一つの対象においてもさまざまな側面からの表現が可能である。したがって、ことばが指示するのは対象のある一面にすぎないし、ことばは対象のありのままを表現しつくせるものではない、ともいえよう。しかしながら両者は互いを成立させるためになくてはならないものである。そうした、ことばと対象の関係を述べたものとして、次のものがある。

saṃjñārthayor anyatve mukhaṃ dahyeta vahninā /

anyatve 'dhigamābhāvas tvayōktaṃ bhūta-vādinā // Ls 7

呼称（saṃjñā）と対象とが異ならないものであるなら、口は火に焼かれるだろう。[呼称と対象が] 異なるものであるなら、[対象の] 知識は存在しないことになる、と真実を語る方であるあなたはおっしゃった。

nāma-mātraṃ jagat sarvaṃ ity uccair bhāṣitaṃ tvayā /

abhidhānāt prthag-bhūtaṃ abhidheyaṃ na vidyate // As 35

あらゆる世界の万象は名ばかりである（nāma-mātra）と、あなたは高らかにおっしゃった。表現から離れてあるものとして、表現の対象は存在しない。

後者の偈にみられる「表現」はことば、「表現の対象」はことばの対象と置き換えることができよう。ことばはその対象がなければ成立しないと同時に、対象もことばがあつてはじめて世界のなかから切り出される。このようにことばとその対象は互いに依存しあつて成り立っているといえる。そして両者いずれにも実体はない（Ls 10）。それゆえ、ことに依存したわれわれの世界は仮構されたものだといわれる。そのことが「名ばかり」と表現されるのである⁶⁾。MK では同様の内容が、「特徴」（lakṣaṇa）と「特徴づけられるもの」（lakṣya）という語で V-1-8 において説かれる。

また仮構という点では、prajñapti や prapañca が重要な術語であり、前者には、ことばによって仮定する、想定する、仮に説く、仮に名づけるといった意味あいが、後者には、言語的多様性、ことばの虚構、概念の広がりといった意味あいが込められている⁷⁾。

したがって、ことが仮のものである以上、ことばによって真理そのものを
知ることは不可能であるし、また逆に真理を説くことも不可能である⁸⁾。しか
し世俗のわれわれがさとの真実に到達したり、あるいは仏がわれわれにさと
りの真実を説くには、ことばという手段に頼らざるをえない。そうした、方便
としてのことば、ことばの限界にも Nāgārjuna はしばしば言及する⁹⁾。

vyavahāram anāśrītya paramārtho na deśyate /
paramārtham anāgāmya nirvāṇaṃ nādhigamyate // MK XXIV-10

【世間の】言語習慣に依らなければ、最高の意味は説かれ【え】ない。最高の意味に到
達しなければ、涅槃は得られない。

また、世俗の世界とというのはことばに依存したものであるが、対してさとり
の世界はことばを超越したものである。そうした真実の世界を Nāgārjuna は次
のように述べる。

apara-pratyayaṃ śāntaṃ prapañcāir aprapañcitam /
nirvikalpaṃ anānāṛtham etat tattvasya lakṣaṇam // MK XVIII-9

何を縁とせず、寂靜で、【言語的】多様性によって多様化されることなく、構想作用を
離れ、意味がさまざまでもない、これが真実の特徴である。

lakṣya-lakṣaṇa-nirmuktaṃ vāg-udāhāra-varjitaṃ /
śāntaṃ jagat idaṃ dr̥ṣṭaṃ bhavatā jñāna-cakṣuṣā // Ls 12

この世間は特徴づけられる対象や特徴から離れ、言葉で喩えられることもなく、寂靜で
ある、とあなたは知識の眼でご覧になった。

すなわち、ある意味では、ことばを介しない世界が真実の世界だということ
ができよう¹⁰⁾。それは、世俗の世界と真理の世界が互いにまったくかけ離れた
ものなのではなく、われわれのはからいを取り払えば、前者がそのまま後者と
なる、ということでもある¹¹⁾。

tathāgato yat-svabhāvas tat-svabhāvam idaṃ jagat /
tathāgato nīḥsvabhāvo nīḥsvabhāvam idaṃ jagat // MK XXII-16

如来が本性としてもつもの、それをこの世間【も】本性としてもつ。如来は本性を欠い
ており、この世間【も】本性を欠いている。

na saṃsārasya nirvāṇāt kiṃcid asti viśeṣaṇam /
na nirvāṇasya saṃsārāt kiṃcid asti viśeṣaṇam // MK XXV-19

輪廻には涅槃とどんな区別もない。涅槃には輪廻とどんな区別もない。

de kho na bñi du brijod pa yin no // mton par brijod pa ni med pa ñid do //
mton par brijod par bya ba dañ / mton par brijod pa yañ med pa yin no // de i phyrī
mya ñan las 'das pa dai byañ grol 'zes bya ba dag don gzan ñid ni na yin no // VP 72

【真実の通りに説いたのである。ことばは存在しない。】……ことばの対象もことばも存

在しない。それゆえ涅槃や解脱というものの意味は異ならない。

b.分別を離れる——構想作用の否定　こうしたことばによって、われわれは
さまざまなことを考える。ことが仮のものである以上、ことばに依存した構
想作用も架空のものである。しかしわれわれはこうした考えに固執し、物事の
ありのままの姿を見失いがちである¹²⁾。Nāgārjuna は構想作用やそれに関連す
る執着¹³⁾、妄想¹⁴⁾、顛倒 (viparyāsa)¹⁵⁾などを否定する。

karma-kleśa-kṣāyaṃ mokṣaḥ karma-kleśā vikalpataḥ /
te prapañcāt prapañcas tu śūnyatāyāṃ nirudhyate // MK XVIII-5

業と煩惱が減することから解脱が【ある】。業と煩惱は構想から【生じる】。それらは
【言語的】多様性から【生じる】。しかし、【言語的】多様性は空であること (空性) に
おいて滅ばされる。

業や煩惱は分別から生じるが、その分別は、多様性をもつことばから生じた
ものである。ことばによる世界は仮構されたものであるから、分別から生じた
ものも仮のものであり、本来空なるものである。われわれの世界は構想によっ
て作り出された世界ともいえる。

atas tvayā jagat idaṃ parikalpa-samudbhavam /
parijñātam asad-bhūtaṃ anutpannaṃ na naśyati // Ls 19

だからあなたは、この世間は構想 (parikalpa) から生じたものである、と認識してい
らっしゃる。生じることのない非存在の要素は滅することもない。

Nāgārjuna は存在論者たちの見解もことごとく否定する¹⁶⁾。なかでも、存在
しないものを存在すると考える「増益」と、存在するものを存在しないと考
える「損減」という二つの極論を否定する¹⁷⁾。

構想作用を離れたところに空の状態があるといえるが、その「空」に執着す
ること、それもまた否定されるべきものである¹⁸⁾。

yady aśūnyaṃ bhavet kiṃcit syāc chūnyam api kiṃ cana /
na kiṃcid asty aśūnyaṃ ca kuṭaḥ śūnyaṃ bhaviṣyati // MK XIII-7

śūnyatā sarva-dr̥ṣṭināṃ proktā nīḥsaraṇaṃ jñānāḥ /
yeśāṃ tu śūnyatā-dr̥ṣṭis tān asādhyaṇ babhāṣire // MK XIII-8

もし空ではない何かが存在するならば空である何かもまた【存在することになるだろ
う】。しかし、空でない何かがあるものは存在しない。どうして空である【何かあるも
の】が存在しようか。(XIII-7) 空の状態とはあらゆる見解を離れることだと、勝者
(仏) たちによって説かれた。一方で、空性という見解をもつ人々、彼らは癒し難いと
【諸仏は】語った。(XIII-8)

sarva-saṃkalpa-nāśāya śūnyatāmṛta-deśanā /

空性という甘露の教えは、あらゆる構想 (saṃkalpa) を減するためのものである。それ (空性) にさえも執着をもつ、そういう人をあなたは救済される。

c.縁起——因果関係と相対性¹⁹⁾ ことばによって世界から切り出され、構想された事物は、それ独自で存在するわけではなく、互いに縁ってはじめで成立する。それは原因と結果のような因果関係でもあり、同時的な相対関係でもある。因果関係に関して、MK にはあまり多くの記述は見当たらないけれど十二支縁起を考察した第26章を中心に説かれる²⁰⁾。同様に十二支縁起を扱う SL 109-111やPH 1-6にも因果関係の記述がみられる。その他では親と子 (SS 13, RĀ IV-55)、煩惱と業と結果 (SS 37, 38)、貪瞋痴とその原因 (SS 59)、呪文や薬草と幻術 (VS 3, 6)、声とこだま (As 4) などの記述がみられる²¹⁾。

相対的な関係については、MK では行為と行為者 (VIII-12)、人と視覚 (IX-4)、浄と不浄 (XXIII-10, 11)、さとりと仏 (XXIV-31) などの例が挙げられる²²⁾。その他の著作では一と多 (SS 7, 32, RĀ I-71, Ns 13, As 14, 38)、同一と別異 (VP 50, 57, 69, 72, Ss 11)、楽と苦 (SS 9, Ns 10)、特徴と特徴づけられるもの (lakṣaṇa, lakṣya; SS 27, Ls 11, 12, Ns 14, Ss 14)、物と色形 (SS 50)、知識と知識の対象 (viññāna, [vi]ññeya; SS 57, Ls 10, As 37, 50)、認識と認識の対象 (pramāṇa, prameya; IV 40, 41, VP 1, 2)、感覚器官と対象 (RĀ IV-54)、長と短 (RĀ I-48, 49, As 12, 13)、行為と行為者 (Ls 8, As 34)、自と他 (SS 17, RĀ I-70, As 11, 16)、親と子 (SL 21, 66) などの記述がある²³⁾。

これら以外では因果関係、相対性のいずれともとれる「縁起」(pratītya-samutpāda, pratītya-samutpanna)²⁴⁾、「縁って」(pratītya, pratyaya)²⁵⁾、「縁って生じた」(pratītya-ja, pratītya-bhāva, pratītyōtpāda, pratyaya-ja, pratyaya-saṃbhūta, pratyayōdbhava)²⁶⁾、「依存した」(apekṣ-, āpekṣika)²⁷⁾、「此縁性」(‘di dag rkyen/ rkyen nīd ‘di pa, *idampratyaya²⁸⁾などの語が用いられる。「縁起」は語義どおり訳せば「縁ってともに生じること」で、これらは上にみたような、原因と副次的原因 (因と縁) から生じること、依存して互いが互いを成立させることも、どちらも含まれているといえよう²⁹⁾。

こうした因果関係あるいは相対的な関係にあるものは、いずれもことばの対象であり構想作用の対象である。したがってこれらも絶対的なものではありえ

ない。原因と結果でいえば、あるとき結果であったものが別のときには原因となることもあるし、相対的なものでは、互いが互いを成立させるという同時的な関係にあって一方が崩れば他方も減するというような、相互依存的なものにすぎない。こうした「縁起」の指摘は最高の教えだとされる。

rtēn cīn ‘brel bar ‘byun ‘di rgyal ba yi // gsun gi mdzad kyi gces pa zab mo ste // gan
gis ‘di ni yan dag mthoñ ba des // sañs rgyas de nīd ng pas mñams mchog mthoñ // SL 112
この縁起は、勝利者 (仏) の教えの蔵のなかでもすばらしくて意味の深い「教え」です。
これを正しく見る人は、仏そのものを知り、最高のものを見ます。

そしてこの「縁起」の状態を、Nāgārjuna は「空」と呼ぶ。

yah pratītya-samutpādaḥ śūnyatām tām pracakṣmahe /
sā prajñaptir utpādāya pratīpat sāva madhyamā // MK XXIV-18
apratītya samutpanno dharmah kaścin na vidyate /
yasmāt tasmād aśūnyo ‘pi dharmah kaścin na vidyate // MK XXIV-19
縁起、それを空であること (空性) だとわれわれは呼ぶ。それ (空性) は依って仮に説かれたものであり、それは中道にはかならない。(XXIV-1830) 縁らないでともに生じるもの (法) は、どのようなものも存在しないから、それゆえ、空でないもの (法) もまた、どのようなものとしても存在しない。(XXIV-19)
したがって逆に、「空」とは一面「縁起」である、ということもできようが、この縁起でさえことばによって仮に説かれたものにすぎない。しかし世俗のわれわれが真理へ至る手段として、それは認めていかざるをえないのである。

sarva-saṃvyavahārāṇś ca laukikān pratibādhaḥ /
yat pratītya-samutpādaḥ śūnyatām pratibādhaḥ // MK XXIV-36
また、あなたが縁起すなわち空であること (空性) を排斥するならば、あなたは世間のあらゆる言語習慣を排斥する [ことになるだろう]。

d.無自性——実体や自我の否定 ことで表現され構想された、依存関係にあるこの世界を構成する事物は、いずれも固有の実体をもたず常に移り変わるものである。縁起したものに実体はないということが、以下には説かれる。

pratītya yad yad bhavati tat tac chāntaṃ svabhāvataḥ /
tasmād utpadyamānaṃ ca śāntaṃ utpattir eva ca // MK VII-16
縁って生じるものはそれぞれ、実体としては滅している。それゆえ [今まさに] 生じつつあるものも、生起そのものも、滅している。

rañ bñin gvis nī ‘ga’ yan med // ‘di la dños po med pa’añ med //
rgyu dan rkyen las skyes pa yi // dños dan dños med ston pa yin // SS 67
実体としてはどんな [存在も] 存在せず、この [世間] には非存在も存在しない。原因と条件とから生じた存在や非存在は空である。

yās ca prāṭhya-bhāvo bhāvanām śūnyatēti sā proktā /

yās ca prāṭhya-bhāvo bhavati hi tasyāsvabhāvatvam // VV 22

また、縁って存在すること、それが諸存在の空性だと [われわれによって] 言われているのである。なぜなら、縁って存在するものとして生じたもの、それには実体はないから。

tat tat prāpya yad utpannam nōtpannam tat svabhāvataḥ /

svabhāvena yan nōtpannam utpannam nāma tat katham // YŚ 19

それやこれに会って生じたところのそれは、実体としては生じてはいない。実体として生じていないところのそれが、どうして生じたといわれようか。

yathā māyā tathā sattva viṣayān paribhūjate //

māyā-mayīm gatīm yānti prāṭhyōpāda-rūpiṇīm // MVīm 8

まるで幻のような命あるものたち (sattva) は、もろもろの対象を楽しむ。彼らは縁って生じることを本性とする、幻からつくられた境地を行く。

ajñāyanānam na jñeyam vijñānam tad vinā na ca /

tasmāt svabhāvato na sto jñāna-jñeye tvam ūcivān // Ls 10

現に知られていない知の対象は [存在し] ない。しかしそれがなければ知は [存在し] ない。それゆえ、実体としては知と知の対象は存在しない、とあなたはおっしゃった。

Nāgārjuna の討論者となるのは Sāṃkhya 学派、Vaiśeṣika 学派、Nyāya 学派などの仏教以外の学派や、仏教内のアビダルマ哲学者といわれる。これら存在論者たちは世界を構成する事物を分析し、最小の単位にまで区分して五位七十五法などの要素を規定していった。Nāgārjuna は世界をこのように区分したり区別して理解するやり方や、そのようにして作り出された概念、範疇を否定し、それらの実体をことごとく否定していった。具体的には原因や条件 (因縁) (MK I-3-14, XV-1), 「去る」こと (MK II-3-25), 感覚器官 (MK III-1-9), 心身の構成要素 (五蘊) (MK IV-1-7, Ls 3, 4), 行為 (MK VIII-1-13, XVII-21), 存在 (ŚS 67), 善 (VV(7), 52-56), 誤解 (VV 66), 原因と結果 (PH 4), 知 (Ls 10) などの実体を否定する。

このように、世界を構成する要素すなわち「法」に実体がないことが中心に説かれるが、特にインド古来からの概念である「自我 (ātman)」の否定もなされる³¹⁾。すなわち、人に我という本体がないこと、さらには広く法にも我のよ³²⁾うな本体はないということが説かれる。

..... bdag 'grub pa ni ma yin no // bdag ni rtag pa ma yin te / mi rtag pa nīd kyī

phyr ro // gaṅ gī phyr raṅ nīd kyis med pas rtag pa'i ho bo nīd med pa yin no / VP 46

..... 『自我は成立しない。』..... 自我は恒常ではない。無常なものだから。というの、自体として存在しないから恒常な本体は存在しないのだから。.....

観有為無常 若無我我所 所有諸魔業 応覚而捨離 BS 98

有為の無常なると若しは我々所無きとを観ず。所有る諸の魔業は応に覺りて捨離すべし

正観於諸法 無我無我所 亦勿捨大悲 及以於大悲 BS 163

諸法を正観するに我無く我所無し。亦大悲と、及び大悲を捨つること勿れ

dhoṣ kun mya nān 'das mtshuts par // de ltar gaṅ gis mnam śes pa //

de tshce de la ji lta bur // nar 'dzin kun tu 'byun bar 'gyur // Ss 18

あらゆる存在は涅槃に等しいと、そのようにある者が知るなら、そのときその人において、どうして自我への執着が生じるであらうか。

yad upādāna-samjñeṣu skandheṣv eteṣu pañcasu /

mohād aham itī grāhaḥ so 'smi-māna udāhṛtaḥ // RĀ V-10

これら五蘊に執着する意識があるとき、愚かさから「私」(aham) という執着 (grāha) が [起こる]。それが慢心 (asmi-māna) といわれる。

gzugs ni bdag ma yin źes gsunts te bdag // gzugs dan mi ldan gzugs la bdag gnas min //

bdag la gzugs mi gnas te de bzin du // phun po lhaḡ ma bzi yaṅ stoṅ rtogs bgyi // SL 49

色形は自我ではない、と説かれ、自我は色形をもつのではなく、色形のなかに自我があるのではなく、自我のなかに色形があるのではない、[と説かれた]。同様に、残りの四つの構成要素 (蘊) もまた空であると知るべきです。

yathā tvayā mahā-yāne dharma-nairātmyam ātmanā /

viditaṃ deśitaṃ tadvad dhimadbhyaḥ karuṇā-vaśāt // As 2

あなたが大乘において事物には自我がない (dharma-nairātmya) と自ら理解された通りに、そのままに、知恵ある人々に慈悲の力によってお説きになった。

ādāv eva samāṇ jātāḥ svabhāvena ca nirvṛtāḥ /

anutpannās ca tattvena tasmād dharmās tvayōdītāḥ // As 17

それゆえ諸事物はもともと平等に生じ、本性としては寂滅している。そして真実として不生である、とあなたはおっしゃった。

こうした人無我と法無我は、のちの瑜伽行唯識学派になると「人法二無我」として体系づけられてゆく³²⁾。

また実体がないことの喩えとして「幻」, 「夢」, 「ガンドルヴァの都」, 「蜃気楼」, 「映像」, 「逃げ水」などがよく用いられる³³⁾。

nīḥsvabhāvas tvayā dhūman rūpādyaḥ samprakāśitāḥ /

phena-budbuda-māyābhra-marīci-kadalī-samāḥ // As 18

色形などは実体のないものである、とあなたは、賢者よ、お説きになった。泡、あぶく、幻、雲、蜃気楼、バナナの樹と同じである、と。

そして、実体がないという点では「仏」も同じである。

如来が本性としてもつもの、それこそこの世間 [も] 本性としてもつ。如来は本性を欠いており、この世間 [も] 本性を欠いている。(MK XXII-16) (テキストは前出)

gaṅ žig rags dan phra ba dan // lci ba dan ni yaṅ ba'i rdul //

sbrol gyi rkañ pa'i rañ bñin med // bla med de la phyag 'tshal lo // Ni 4

粗大であったり微細であったり、重かったり軽かったりする原子 [や]、蛇の足の実体
【のように、その方は】存在しない、そうしたこの上ない方に礼拝します。

e. 空——さとりりの世界 以上見てきたような世俗のはからいを超越したところ
ろに、さとりりの世界が広がる。Nāgārjuna はことばによって表現しつくせず、
構想作用を離れ、因果関係あるいは相対的關係にあり、不変の実体としては存
在しない、世界のもの、この様子を「空」とよんだ。

縁起、それを空であること（空性）だとわれわれは呼ぶ。それ（空性）は依って仮に説
かれたものであり、それは中道にはかならない。(MK XXIV-18) 縁らないでともに
生じるもの（法）は、どのようなものも存在しないから、それゆえ、空でないもの
（法）もまた、どのようなものとしても存在しない。(XXIV-19) (テキストは前出)

rañ bñin gyis ni 'ga' yañ med // 'di la dños po med pa'añ med //

rgyu dan rkyen las skyes pa yi // dños dan dños med stoñ pa yin // ŚS 67

dños kun rañ bñin stoñ pas na // de bñin gśegs pa mtshuñs med pas //

rten cñ 'brel pañ 'byuñ ba 'di // dños po mams su ñe bar bñtan // ŚS 68

dam pa'i don ni der zad de // 'jig rten ñor byas tha sñad dag // sna tshogs

thams cad rdzogs sañs rgyas // bcom ldan 'das krys bñen brtags mdzad // ŚS 69

実体としてはどんな [存在も] 存在せず、この [世間] には非存在も存在しない。原因
と条件とから生じた存在や非存在は空である。(67) あらゆる事物は実体が空であるか
ら、諸事物のこうした縁ってともに生じること（縁起）が比類ない如来によって説き示
された。(68) 最高の意味はそれに尽きる。世間に従い言語習慣 [に依って]、さまざま
なことをすべて完全に、仏である世尊は正しく考えられた。(69)

また、縁って存在すること、それが諸存在の空性だと言われているのである。なぜなら、
縁って存在するものとして生じたもの、それには実体はないから。(VV 22) (テキスト
は前出)

yañ pratīya-samutpādañ sūnyatā sāva te matā /

bhāvañ svatanthro nāstīti sñpha-nādas tavātulañ // Ls 22

縁起、それこそが空性であるとお考えになった。それ自身に依って（独立し
て）存在しているものはない、とはあなたの類い希なる獅子の叫びである。

yañ pratīya-samutpādañ sūnyatā sāva te matā /

tathā-viḥasā ca sad-dharmas tat-samañ ca tathāgatañ // As 40

縁起、それこそが空性であるとお考えになった。そして正しい教えも同じあり
方であり、また如来もそれと同一である。

「空」は同義語として、涅槃³⁴⁾、解脱、真如、寂滅、寂離 (vivikta)³⁵⁾など
が用いられることもある。

そして、あらゆるものが空であり、仏も空であるとき、ことばによって仏を

称えることにも矛盾が生じる。

evañ stutañ stuto bhūyād atha vā kim uta stutañ /

śūnyeṣu sarva-dharmeṣu kañ stutañ kena vā stutañ // Ps 9

このように称えられた [あなたが] 称えられますように。さてところで、どのようにし
て称えられたのだろうか。あらゆる諸事物が空であるとき、誰が称えられるのか、また
誰によって称えられるのだろうか。

空であることばで、空である仏を、空であるわれわれが称える。真理の世界
からはいずれも空として実体のないものであるけれど、世俗の真実としては、
ことばも仏も称えることも、いずれも区別された重要なものであり、方便とし
てなくてはならないものである。われわれはことばを出発点として、構想作用
の否定、相対性や因果関係、実体の否定を経て、空へとたどり着いたが、その
空はまたことばの問題へと引き戻される。

「空」とは、この世界をさとの側から見表現したものであって、決して
われわれが生きる世界と別なものを指しているのではない。「ことば」という
フィルターを通して見た世界が世俗の世界であり、フィルターを介せず見たあ
りのままが、さとの世界とでもいうことができようか。

諸著作の哲学的記述は、いずれも上にみた a. — e. に分類することが可能
である。これら以外は、信仰や菩薩道の実践に関わる記述である。本稿の最後
に、諸著作の記述を上にもみた a. — e. に分類して表にしたものを掲げる。そ
こでは上述の5つに加え、哲学的記述以外のものとして、ここでは詳細に検討
できなかったけれど、信仰に関するものや菩薩道の実践に関わるものを6つ目
に分類 (f. 信仰・実践) した。

3. 諸著作の分類

ここで扱う17作品にはいずれも先に見たような空の思想が、多かれ少なかれ
共通して説かれる。しかし著作によっては、著述の目的や傾向が異なる。

Nāgārjuna の著作の分類に関しては、すでにサブセクトにおいて、「論理の集ま
り (rīgs tshogs)」, 「讃歌の集まり (bstod tshogs)」, 「話の集まり (gtam
tshogs)」と3分類したものである。これらのうち具体的な著作名が明らかに
なっているのは、「論理の集まり」に配当される MK, ŚS, VV, YS, Vaidalyasūtra

の5つ、あるいはこれらに RA か VS を加えた6つである³⁶⁾。

この3分類を用いて本稿での諸著作を分け直してみると、「論理の集まり」に $MK, SS, VV, VS, VP, YS, PH, MVim$ が、「讃歌の集まり」に LS, NS, AS, PS, Ss, Nt が、「話の集まり」に BS, RA, SL が当てられよう。ただし、「讃歌の集まり」は形式上は讃歌であるが、内容的にみれば空の思想を説く、非常に哲学的なものである。また「論理の集まり」には論争を中心としたものと、特に討論するわけではなく哲学的思想を述べたものとの2つが含まれる。後者の哲学的なものは「讃歌の集まり」の内容に近いものといえる。

こうしたことを考慮して、形式上の違いではなく内容の違いから、新たな3つの分類を仮に立て、次のように定義しておく。

論争の著作³⁷⁾：当時の仏教内外の存在論者たちや論理学派との論争が行われる、あるいは論理学派との関わりがうかがえる著作。原則として対論者によることば（偈または経）があるものをこれに入れる。

実践的著作：空の思想を説く哲学的記述もあるけれど、大乘菩薩道の実践が中心に説かれる宗教実践的な著作。

哲学的著作：上の二つに分類されないもので、空の思想を説くことを主眼とする哲学的な著作。特に論争するわけではないが対論者の存在を念頭に置いた哲学的記述が展開される。

17作品の中には線引きが容易でないものもあるが、次のように分類を試みた。

論争の著作： MK, SS, VV, VS, VP

実践的著作： BS, RA, SL

哲学的著作： $YS, PH, MVim, LS, NS, AS, PS, Ss, Nt$

VS には対論者の偈はないが³⁸⁾、 $Kamalaśīla$ が述べるように6偈全体³⁹⁾が3支からなる論証式に還元できる³⁹⁾ことから、論理学派との何らかの関わりが予想されるため、論争の著作に分類した。また、 YS は空を説く哲学的記述が中心であるけれど、清浄や不浄、善悪の判断など宗教倫理的な表現がしばしば入り混じり、「空」に代わって「寂離」、「涅槃」、「解脱」といった語が多用されることから、実践的傾向、あるいはその萌芽をあわせもっているといえる。

次に、分類ごとの特徴をみておく。論争の著作では、 MK, SS, VV, VP の順に論争の度合いが強まっていくといえ、最後の VP では相手の論理を利用した、

あるいは逆手に取った、徹底した議論が展開される。特に、自説として展開される「自相統転変差別」の語⁴⁰⁾や「刹那滅」を認める記述⁴¹⁾は、 $Nāgārjuna$ の他の著作にはみられないものであり、これらは真偽性が問われる個所といえる。実践的著作では、比較的記述量の多い作品が多く、地獄の描写などもあり語彙が豊富である。ただ記述量としては空の思想よりも菩薩道の実践に多くが割かれ、特に SL では極端に哲学的記述が少ない。それゆえ、 VP が論争への深入りだとすれば SL は実践への深入りといえ、両者は対極をなすといえよう。哲学的著作では、比較的短い作品が多い。特に讃歌では、複数偈にわたって一つの主題が繰り返られる論争の著作と異なり、大半が一偈で完結し、また比喩が多用されるなど、簡潔に巧みに空の思想が説かれる。これら讃歌は内容的には哲学的であるが、形式は仏塔での礼拝に用いられる実践的なものであり、この点興味深い。また、 AS には $dharmanairātmya$ や $paratantra$ など⁴²⁾、後代の思想につながるような用語がみられ、注意が必要である。

4. ま と め

本稿では、 $Nāgārjuna$ の真作と認められる17の著作に説かれる哲学的側面を分析したが、いずれの著作にも、先に確認したような空の思想が説かれることが確認できた。この点は、 $Nāgārjuna$ の他の著作の真偽性の判断に際して、空の思想に関する哲学的記述の有無が一つの根拠となりうることを示すものである⁴³⁾。ただし、このことは必ずしも、空の思想が説かれていれば真作である、ということではない。後代の人物が $Nāgārjuna$ に仮託して彼の思想を述べることも十分考えられるし、周知のように空の思想は後の多くの論師に継承されていくからである⁴⁴⁾。すなわち空の思想に関する記述は、真作としての必要条件ではあっても十分条件とはいえないということである。

ここで検討した著作に説かれる哲学的思想は、いずれにおいても根本的に共通しており、思想の変遷といえるまでの変化は確認できなかった。ただし、試みに諸著作を3分類したように、作品の傾向は大きく3つに分かれるといえるのではないだろうか。こうした多様性に富んだ内容からは、 $Nāgārjuna$ の興味や関心がさまざまなであったこと、あるいは移り変わる様子がうかがい知れる。また、空の思想を確立し、独自の論理を駆使して他学派と論争する一方で、王

と親交をもち菩薩道の実践を勉めるさまは、高度な知識と鋭い智慧を兼ね備えた学者であると同時に、宗教心と道徳心をも備えた僧侶という、多才な人物像も浮かび上がらせる。

一方、個々の真偽性に関しては、いずれの著作にも少なからぬ問題が残されている。そのことはすでに多くの先行研究で明らかにされているが、ここで逐一指摘することはできなかった。ただ、真作が確実視される *MK* を基準としてみたとき、論争の著作と実践的著作では、ともに *MK* の哲学的側面から離れてそれぞれの傾向を強めたものがあることから、どこまでが *Nāgārjuna* のものと認められるのか、それ次第では人物像も違ったものになる。また哲学的著作においても、特に讃歌では、簡潔に巧みに空の思想が説かれるほか、なかには後代の思想につながるような用語がみられることは注目され、それらは彼の思想の変遷といえるのか、それとも著者が異なるのか、この点の解明も重要である。

今後の課題としては、論争の著作では、『方便心論』や *Nyāyasūtra* をはじめ、論理学関係の著作との比較がさらに望まれる⁴⁵⁾。実践的著作では、『十住毘婆娑論』などとの比較が望まれる。また、わずかにみられる *BS* 第75、76偈の「本願」や *SL* 第121偈の「無量光」、「無量寿」など、阿弥陀仏の浄土信仰とのかわりも興味深いところである。哲学的著作に関しては、*Nāgārjuna* から唯識学派にかけての移行期の思想との比較が必要であろう。具体的には *Samdhinirmocanasūtra* や *Lankāvatārasūtra* といった経典や、如来蔵思想や三性説などとのさらなる比較検討が望まれる。

註

- 1) これらの真偽性に関してはすでに拙稿(2006)『Catuḥstavaとナーガールジュナ―諸著作の真偽性』(博士論文、京都大学)で検討した。
- 2) このタイトルは後代に呼ばれ始めたものと推測され(斎藤明(1988)「<初期>中観派とブッダパーリタ」、『仏教学』, 24, pp. 34.22-39.17)、本来のタイトルは不明。語末が *-kārikā* のこのタイトルで本作品全体を指す場合、複数形で示すのが妥当ではないかと思われる。例えば Candrakīrti は **Mādhyamakāśāstrastuti* において *Nāgārjuna* の諸著作を列挙するが、そこでは単独の著作としては本書のみ *kārikā* の複数形 (*śāstra-gaḍiās tāh kārikāh* : de Jong, J. W. (1962) "La Mādhyamakāśāstrastuti de Candrakīrti", *Oriens Extremus*, 9, p. 51.2) で言及する。現代の研究者にもこれを複数として扱う者がある。

その際の語尾は *-kārikāh* (J. W. de Jong, K. C. Lang, I. Mabbett, 平川彰) *-kārikās* (L. de La Vallée Poussin, D. Seyfort Ruegg, F. Tola and C. Dragonetti, C. Oetke, T. Vetter), *-kārikā* (フランス語の冠詞 *les* がつく: J. May, C. Scherrer-Schaub) (文献名は略) と分かれる。筆者はかつて *-kārikāh* と表記することを支持した(拙稿(2006) pp. 384.18-385.27) が、他の著作のタイトルとの兼ね合いもあり、語末は語幹で表記することに統一して、この問題は保留しておきたい。

3) *Nāgārjuna* の言語観については次のような論稿もある: 斎藤明(1998)「空と言葉」、『宗教研究』, 316, pp. 27-52; 敵部俊也(1998)「インド言語思想における<言語=名称論>批判」、『仏教学セミナー』, 67, pp. 23-46。

4) *VP* 17, 52, 53 には **samketa* あるいは **samaya*, **sāmavāyika* に相当する *brda byas* [pa] という語がみられる。

5) *vyavahāra* の語がでてくるものは: *MK* XVII-24, XXIV-6, 10, 36, *ŚS* 1, 69, *VP* 28, 55, *VS* 5, *VP* 17, 52, *BS* 120 (世言), 144 (世論), *RA* II-14, IV-64, *Ls* 8。

6) 次に似たような記述がある。

rūpasvābhāva-mātratvād ākāśam nāma-mātrakam /

bhūtair vinā kuto rūpaṃ nāma-mātrakam apy atah // RA I-99

色彩は非存在にすぎないから虚空は名ばかりのものである。諸要素がないのにどうして色彩が[あろう]か。だから[色彩]も名ばかりのものである。

bdag med bdag med min pas brjod 'ga' an med //

brjod bya nya nian 'das dan mtshun / dños po kun gyi ran bñin ston // ŚS 2

自我はなく、無我はなく、自我かつ無我はないのだから、表現というものは何もない。表現されるあらゆる事物は、涅槃と同じで、実体が空である[から]。

mtshan gāi las gzan mtshan nū las // mtshan gāi grub par ran ma grub //

phan tshun las kyaṇ ma grub ste // ma grub ma grub sgrub byed min // ŚS 27

特徴づけられるものから他方(特徴)が[成立し]、特徴から特徴づけられるものが成立するのであって、それ自体で成立するのではない。[また]互いから[互いが]成立するでもない。未成立な[一方]が未成立な[他方]を成立させることはない[から]。

「名のみ」という語は *SL* 123 にもみられる。その他、ことばと対象に関するものとして: *VP* 35, 36, 50, 52, 57, 58, 64, *VP* 51-55, 65, *Ls* 11。

7) 両語いずれかがみられるもの: *MK* 帰, IX-3, XI-6, XVIII-5,6,9, XIX-5, XXII-8, 10, 11, 15, XXIII-10, 11, XXIV-18, XXV-24, *BS* 48, *RA* I-47, 50, 51, *Ps* 2, *Ss* 5, 9. また、ことばの世界が仮のものであるということが *MVim* 8 に説かれる。

8) ブッダの沈黙への言及: *MK* XXIV-12, *RA* I-73, II-8, 15, 18. 関連論考: 梶山雄一(1973)「竜樹―その人と思想」、『アジア文化』, 10-1, pp. 98.下17-102.上9。

9) 次に挙げるもの以外に: *MK* IX-3, XVII-27, XXII-10, 11, *ŚS* 1, 44, 69, 70, 71, *VP* 28, *VS* 5, *Ys* 21, 33, *BS* 12, *RA* I-90, IV-64, 94-96, *SL* 3, *MVim* 1, *Ns* 16, 19-24, *As* 57, *Ps* 2, 9, 10, *Ss* 1, 5, 7, 9。

10) *MK* XVIII-7 では、「語られるべきもの」(*abhidhātavyam*) が減じた状態が「法性」と関連づけられている。その他: *MK* XXV-24, *RA* I-51, II-14, *Ns* 7, 14, *As* 23, 39, 44, *Ps*

1, Ss 3.

11) 次に挙げたもの以外に: *MK* XXV-20, *Ns* 6.

12) 誤った考えにとらわれることへの言及: *MVim* 10, *RĀ* 1-16.

13) 執着を否定する主なものに: *MK* III-8, VIII-13, X-15, XVI-3, 9, XVIII-4, XXII-13, XXIII-13-16, XXIV-28, *ŚS* 34, *Ys* 15, 30, 40, 41, 43, 46, 49, 53, 55, 56, 58, *BS* 144, *RĀ* I-35, 42, 55, 56, II-48-70, III-30, 37, 87, IV-65, V-24, 25, 27, *SL* 12, 25, 42, 98, *MVim* 1, *Ls* 5, 23, *Ns* 8, *As* 52, 54, *Ss* 4, 18.

14) 妄想に言及する主なもの: *MK* XIII-1, XXI-11, *ŚS* 64, *VP* 15, *PH* 6, *Ys* 12, 18, 23, 37, 38, 42, 57, *RĀ* I-98, II-12, 13, IV-62, V-19-21, *MVim* 10, 19, 20.

15) *MK* XXIII-1, 2, 6, 13, 14, 16-21, 23, *ŚS* 9, 10, 59, 62, *Ys* 24, *BS* 72, 73, *RĀ* IV-57, *SL* 48, 51.

16) *MK* XXV-21, XXVII-1, 2, 13, 14, *ŚS* 全体, *VP* 全体, *VS* 全体, *Ys* 3, 12-14, 17, 18, 23, 24, 30, 40-47, 49, 50, *RĀ* I-61, III-68, V-50, *Ls* 21, *Ns* 1, *As* 51, 54, *Ss* 4, 9, 10, 16.

17) *MK* 帰, V-8, IX-12, XV-7, 10, 11, XVI-10, XVIII-10, 11, XXI-14-17, XXIII-13, 14, XXV-3, 10, 21, 23, XXVII-15-29, *ŚS* 1, 21, 25, *VS* 3, 4, *Ys* 1, 2, 4, 57, *BS* 101, *RĀ* I-42-46, 50, 51, 57-59, 61, 62, 71, 76, 78, II-5, 19, 74, *MVim* 11, *Ls* 20, *Ns* 14, *As* 7, 22, 37, 39, 46-48, *Ps* 4, *Nt* 8. またこれら二つに関しては次にも考察を行なった: 拙稿 (2006) pp. 42.22-43.6.

18) 次に挙げたもの以外に: *MK* XXII-11, XXIV-11, *As* 36.

19) 榎本文雄氏には次の資料をお送り頂いた。紙面を借りて御礼申し上げたい。当資料は本項での考察に非常に有益であった。五島清隆 (2005) 「十二門論」から見た初期中観派の縁起説 (日本南アジア学会、龍谷大学でのパネル討論資料)。

20) *MK* XXIV-16, XXVI-1-9. 十二支縁起の説示を重要視する研究に: 松本史朗 (1989) 『縁起と空』, 大蔵出版, pp. 335-371; Katsura, S (1997) *Nāgārjuna and Pratītyasamutpāda*, 『印度学仏教学研究』(『印仏研』), 46-1, pp. 24-29.

21) その他, *ŚS* 8, 47, 63, 64, 67, *Ys* 10, *RĀ* I-46, 47, 50, *As* 6, 44, *Ss* 6.

22) その他, *MK* IX-5, XVIII-10, XXVII-1, 2.

23) その他, *ŚS* 11, 55, 56, 61, *RĀ* II-4, *SL* 66, *Ls* 9.

24) *MK* 帰, XXIV-18, 19, 21, 36, 40, *ŚS* 7, 68, *VS* 3, *Ys* 14, 23, *SL* 112, *Ls* 22, *As* 40. なお、縁起とは同時的な相対性を指すものではないとする見解もある。例えば、松本史朗 (1989) pp. 11-97; 山口瑞鳳 (2005) 「邪説「相対性縁起」の暴走一般若波羅蜜多修習の否定一」, 『成田山仏教研究所紀要』, 28, pp. 51-122.

25) *MK* VII-16, XII-2, XVII-27, XVIII-10, XIX-6, XXII-3, XXIII-6, XXIV-31, XXV-9, *VP* 54, *VS* 6, *Ys* 1, 43-45, *Ls* 9, *As* 3, 4, *Ss* 5, 7.

26) *MK* XVII-29, *ŚS* 8, 14, 16, 36, 48, 61, *VP* 22, 66, *PH* 1, 6, *Ys* 帰, 12, 18, 48, *RĀ* I-87, *MVim* 3, 8, *Ls* 9, 21, 24, *As* 1, 6, 43, 44.

27) *MK* X-8-12, XIX-1-3, XXIII-10, *VP* 40-45, *VP* 1, 2, *As* 11, 12.

28) *ŚS* 73.

29) 次には因果関係と相対性がともに説かれる。

‘dis ni rgyu dan’ bras bu dan // tshor dan tshor ba po sogs dan //

lta po blta bya sogs ci’añ ruñ // de kun ma lus bsad pa yin // *ŚS* 28

これによって、原因と結果、感受と感受する者など、見る者と見られる対象など、どんなものであっても、すべて残りなく [同じように] 説明される。

また特殊な用語としては、*vasika* 「依存した」 (*Ls* 24, チベット訳: *gzan dbañ*, 注釈書による語義説明: *vasikāḥ parāyattāḥ kartv-ādy-apekṣātāḥ* (7b6, 拙稿 (2006) p. 192.12) 「*vasika* とはつまり、他に依存した。行為者などに依存したのとして。』), 三性説との関連が疑われる *paratantra* 「他に依存した」 (*As* 16, 44, 45) がある。

30) 当稿の解釈に関して: 吉水千鶴子 (1997) 『Upādāyaprajñapti について—Mūla-madhyamakakārikā XXIV18 を考える—』, 『成田山仏教研究所紀要』, 20, pp. 95-155.

31) ātman の否定: *MK* IX-9-12, X-15, 16, XVIII-1, 2, XXVII 全体, *VP* 46, *Ys* 24, 25, 43, *BS* 98, 163, *RĀ* I-41, 82, 83, 100, *SL* 48, 49, 58, *MVim* 5, 20, *Ls* 6, *As* 2; 我意識 (*abhaṅkāra*) の否定: *MK* XVIII-2, 3, *ŚS* 34, *RĀ* I-27-40, II-24, 25, *Ss* 18; 我執 (*upādāna*, *aham iṭi grāha*) の否定: *MK* XVIII-4, *RĀ* V-10, *SL* 49 と *RĀ* 54 では「五蘊は我ではない」と説かれるが、この点は「非我」を説くとされる初期経典の、例えば『無我相経』の所説 (服部正明 (1987) 「仏教学派の無我論に対する批判」, 『印度哲学仏教学』(『印哲仏』), 2, pp. 333.7-334.6) と共通し注目されるが, *RĀ* I-82 では五蘊が我ではなく (非我), さらに我も存在しないこと (無我) が説かれ, *MK* XVIII-1 でも五蘊と我とが同一でもなく (非我) 別異でもない, すなわちいずれも実体としては存在しないこと (無我) が説かれる。*Nāgārjuna* は伝統的な「五蘊が我でない」という説を踏まえて、最終的には「我の非存在」を説いたといえる。参照文献: 中村元 (1963) 『自我と無我』, 平楽寺書店, pp. 66-83. *Nāgārjuna* と我に関しては斎藤明 (1991) 「ナーガールジュナにおける自我とニルヴァーナ」, 『<我>の思想』, 春秋社, pp. 181-196 に詳しい。32) その状況に関して: 早鳥理 (1985) 「入法二無我論—瑜伽行唯識学派における一」, 『南都仏教』, 54, pp. 1-18; 拙稿 (2006) pp. 43.12-47.8.

33) こうした喩えは特に諸讃歌において多用される。*MK* VII-34, XVII-33, XXIII-8, 9, *ŚS* 14, 36, 56, 66, *VP* (13), 23, 27, 65, 68, *VS* 2, *VP* 3, 11, *Ys* 7, 15-17, 27, 45, 54, 56, *BS* 83, 84, *RĀ* I-31-33, 52-56, II-1, 9-13, *SL* 58, *MVim* 4, 8, 16-18, *Ls* 3, 4, 14, 18, 20, 24, *Ns* 14, 18, *As* 4, 5, 18, 24-27, 29, 30, 33, 47, 48, 51, *Ss* 8.

34) *Ys* では「空」よりも多用される。

35) *ŚS* 38, *Ys* 25, 30, 31, 56, 59, *Ls* 1. 『八千頌般若経』にもしばしばみられる。

36) 詳しくは、ツルティム・ケサン (1986) 「チベットに於けるナーガールジュナの六つの「理論の集まり」について」, 『印仏研』, 35-1, pp. 175-178; 小林守 (1989) 「中観莊嚴論」とその注釈書をめぐって二、三の問題」, 『仏教学』, 26, pp. 9.7-11.8.

37) かつて拙稿 (2006) pp. 445-448 ではこの「論争の著作」を「論理学的著作」と呼んだが、これらは存在論者の見解を否定したり論理学書を「批判し、抑えする」(堀山雄一 (1984) 「仏教知識論の形成」, 『講座大乘仏教 9 認識論と論理学』, 春秋社, p. 17.13) ものであり、必ずしも論理学のルールにのっとったものではない。したがって分類名をこのように変更したい。

38) *VS* は6偈のみ現存するが、それは作品の一部である可能性もある。Lindtner, Chr.

- (1983) "Nāgārjuna's Vyavahārasiddhi", *Contributions on Tibetan and Buddhist Religion and Philosophy*, Wien, pp. 150.2-151.4.
- 39) Ichigo, M. (1985) *Madhyamakālamkāra of Śāntarakṣita with his own Commentary or Vṛtti and with the Subcommentary or Pañjikā of Kamalaśīla*, Buneido, p. 213.11-13; Lindtner, Chr. (1983) p. 153.6-11.
- 40) VP 57. Pind, O. H. (2001) "Why the Vaidalyaprakaraṇa cannot be an authentic work of Nāgārjuna", *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens*, 45, pp. 149-172; 拙稿 (2004) 「Vaidalyaprakaraṇa における「自相転変差別」について」, 『人文知の新たな総合に向けて 第3回報告書』, 上巻, 京都大学大学院文学研究科, reprint 2005, pp. 494-498; 拙稿 (2006) pp. 403.7-407.23.
- 41) 「瞬間的存在性 (刹那滅性) のためでもある」(VP 61) という, 作者のことは。Nāgārjuna は「刹那滅」を認めない, あるいは「刹那滅」を自説として持ち出すことはない。MK では刹那滅に触れた箇所はないが, XIX, XX, XXI などの記述からこのことが伺われるし, RA I-67-69 では「刹那滅」の否定が明らかに述べられている。拙稿 (2006) p. 407.24-32.
- 42) 詳しくは, 拙稿 (2003) 「Aciṃyastava と三性説の関係について」, 『南都仏教』, 83, pp. 98-128; 拙稿 (2006) pp. 42-68.
- 43) 例えば, Nāgārjuna 作と伝承される *Sūtrasamuccaya* は偽作であることが明らかであるが, その内容は経典の集成であって, 作者による哲学的記述はない。(一鳥正真 (1990) 「Sūtrasamuccaya 経集」, 『印仏研』, 38-2, pp. 302-309; 拙稿 (2006) pp. 433-442) そのほか, Nāgārjuna に帰せられる2つの *Aṣṭamahāsthānacyāstotra* (P nos. 2024, 2025: これらは同名異作) が挙げられる。これら2讃歌はシャーキヤムニブツダにゆかりの八丈聖地とそこでの出来事に関する讃歌であり, 八丈聖地の成立年代から考えて, その成立は Nāgārjuna 以後である可能性が高いといえる。これらには空の思想は説かれない。(拙稿 (2007) 「Nāgārjuna に帰せられる *Aṣṭamahāsthānacyāstotra* について」, 『印仏研』, 56-1, pp. 105-110)
- 44) 空も説かれるが真作とは認められないものとして, 例えば *Bodhicittanirāṇa* (Williams, P (1984) "Review article: Chr. Lindtner (1982) *Nagarjuniana*", *Journal of Indian Philosophy*, 12-1, pp. 83.37-89.26; 拙稿 (2006) pp. 430-432) や『十二門論』(五島清隆 (2002) 「『十二門論』の構成と著者問題」, 『初期仏教からアビダルマへ』, 平楽寺書店, pp. 447-465; 拙稿 (2006) p. 443) が挙げられる。そのほか, Nāgārjuna に帰せられる *Kaṣṭrayāstotra* (P no. 2015) は, 法, 報, 化の三身を称えた讃歌であり, 法身を称える第1偈に「一でも多くなく」, 「言語的多様性を離れた (nisprapañca)」といった空を説く哲学的記述がわずかにみられる。しかしながら, 三身の成立時期からみてその成立は Nāgārjuna 以後である可能性が高い。(拙稿 (2005) 「『三身讃』について」, 『印仏研』, 54-1, pp. 84-87)
- 45) すでに石飛道子氏により, 『方便心論』を中心に, VP や VV を含めた一連の論理学書の解明が進んでいる。石飛道子 (2006) 『龍樹造「方便心論」の研究』, 山喜房仏書林。
- 使用テキスト
- MK : de Jong, J. W. (1977) *Mūlamādhyamakakārikāh*, Madras; MacDonald, A. (2007) "Revisiting the Mūlamādhyamakakārikā", 『インド哲学仏教学研究』, 14, pp. 25-55; Ye Shaoyong (2007) "A re-examination of the Mūlamādhyamakakārikā on the basis of the newly identified Sanskrit manuscripts from Tibet", 『創価大学国際仏教学高等研究所年報』, 10, pp. 149-170.
- SS : Lindtner, Chr. (1982) *Nagarjuniana*, Copenhagen, pp. 31-69; Erh, F. R. (1990) *Die Śānyātsaptati des Nāgārjuna und die Śānyātsaptatīrti [Verse 1-32]*, Dissertation, Universität Hamburg, Hamburg.
- VV : Johnston, E. H. and Kunst, A. (1951) "The Vīgrahavyāvartanī of Nāgārjuna with the author's commentary", *Mélanges Chinois et Bouddhiques*, 9, pp. 99-152.
- VS : Ichigo, M. (1985).
- VP : 梶山雄一 (1965) 「The Vaidalyaprakaraṇa of Nāgārjuna」, 『インド学試論集』, 6-7, pp. 129-155.
- PH : Gokhale, V. V. (1955) "Der Sanskrit-Text von Nāgārjuna's Pratītyasamutpādhārdaya-kārikā", *Studia Indologica, Festschrift für Willibald Kirfel zur Vollendung seines 70. Lebensjahres*, Bonn, pp. 101-106; Gokhale, V. V. (1978) "Encore: the Pratītyasamutpādhārdaya-kārikā of Nāgārjuna", *Principal V. S. Apte Commemoration Volume*, Poona, pp. 62-68; 梶山雄一 (1981) 「蔵本『因縁心論釈』」, 『日本仏教学会年報』, 46, pp. 1-15.
- YŠ : Lindtner, Chr. (1982) pp. 100-119.
- BS : 大正 1660, 大野法道 (1932) 「菩提資糧論」, 『国訳一切経 論集部』, 5, 大東出版社, pp. 35-131. 偈番号は拙稿 (2006) pp. 418-420 のもの。
- RA : Hahn, M. (1982) *Nāgārjuna's Ratnāvalī, Vol. I*, Bonn; Eda, A. (2005) *Untersuchungen zur Nāgārjunas Ratnāvalī unter besonderer Berücksichtigung des Kommentars des Royal Ishab*, Dissertation, Universität Marburg, Marburg.
- SL : Pena Tenzin (2002) *Suḥrītlekha of Ācārya Nāgārjuna and Vyaktapadāṭikā of Ācārya Mahāmāli, Vārāṇasī*.
- MVin : Tucci, G. (1956) "Mahāyāna Vinśikā of Nāgārjuna", *Minor Buddhist Texts I*, Roma, pp. 193-203.
- LS : Lindtner, Chr. (1982) pp. 128-139; 拙稿 (2006) pp. 71-82, 125-131.
- Ns : Tucci, G. (1932) "Two hymns of the Catuḥstava of Nāgārjuna", *The Journal of the Royal Asiatic Society*, 1932, pp. 312-321; 拙稿 (2006) pp. 83-94.
- As : Lindtner, Chr. (1982) pp. 140-161; 拙稿 (2006) pp. 95-116.
- Ps : Tucci, G. (1932) pp. 322-325; 拙稿 (2006) pp. 117-124.
- Ss : 拙稿 (2006) pp. 348-352. Nt : 拙稿 (2006) pp. 353-355, 379-380.

* 本稿は, 2007年10月開催の仏教史学会における発表に基づいたものであるが, 紙幅の関係で発表の前半部分のみを扱った。後半部分に関しては他の機会を俟ちたい。

* () 内の数字は対論者による帰属あるいは経。

	a. ことば	b. 分別の否定	c. 縁起	d. 実体の否定	e. 空	f. 信仰・実践
MK	婦, V-1-8, IX-3, XI-6, XVII-24, 27, XVIII-5-7, 9, XXII-8, 10, 11, 15, 16, XXIII-11, XXIV-6, 8-10, 12, XXV-17-20, 24	婦, I-1, II-14, 20, IV-5, 8, 9, V-8, VI-7, 8, VIII-13, IX-3, 12, X-8-16, XI-1-8, XII-1-10, XIII-1, 2, 7, XV-6, 7, 10, XVI-1-10, XVII-24, XVIII-4-12, XIX-1-6, XX-1-24, XXI-11-14, (15), 16-21, XXII-5-8, 10-14, XXIII-(1), 2-6, (7), 12-23, XXIV-11, 13, 15, 28, 34, 35, XXV-3-18, 21-23, XXVI-10-12, XXVII-1, 2, 13-30	婦, IV-1-10, V-16, VII-1-12, VIII-1-12, IX-1, (2), 3-8, X-1-5, (6), 7, XII-2, XIV-1-8, XV-3-5, XVIII-10, 11, XX-19, XXI-1-10, XXII-4, 8, 9, XXIII-10, 11, 23, XXIV-16, 18, 19, 21, 31, 36, 40, XXV-6-9, 12, XXVI-1-9, 12, XXVII-1, 2, XXVIII-1, 2	I-(2), 3-14, II-1, (2), 3-25, III-(1), 2-8, IV-6, 7, VII-1-(4), 5-7, (8), 9-34, IX-9-11, X-13-16, XII-4-6, XIII-(3), 4-6, XIV-1-5, 8, 9, XV-1-20, 22, 21-27, (28), 29-33, 39, 40, XVIII-1-4, XX-21, XXI-17, XXII-1-4, 12, 14, 16, XXIII-(1), 2, 3, 6, 8, 9, 15, 24, 25, XXIV-16, 17, 21-30, 32, 33, 38, XXV-3-12	IV-8, 9, V-8, XIII-2, 7, 8, XVII-27, XVIII-5, 7-9, XXI-9, XXII-10, 11, 16, XXIII-13-16, XXIV-(1)-6, 7-14, 18-20, 22, 33, 36, 37, 39, 40, XXV-(1), 2-20, 22-24, XXVI-10-12, XXVII-29	—
SS	1, 2, 27, 44, 69-71	4-6, 9, 10, 17, (18), 19-23, 25, 29, 31, 32, (33), 34, 35, 39-42, 49, 51, 58, 60-62, 64, 65, 72, 73	7, 8, 11, 13, 14, 16, 27, 28, 37, 38, 47, 50, 51, 55-57, 59, 61, 63, 64, 67, 68, 71, 73	2, 3, 7, 8, 11, 12, 14, (15), 16, 24, 26, 29, 30, 34-36, 43, 45-48, 52, 53, 55-57, 59, 66-68, 71	2, 3, 23-25, 37-42, 44, 53, 54, 56, 61, 63, 65, 67-69, 72, 73	—
VV	(1-3, 9, 12), 21, 23-28, 35, 36, 55, 57, 58, 64	(5, 6, 13-16), 27, 29-34, 40-48, 51, 56, 60, 62, 63, 66-68	22, 40-44, 49, 50, 54, 66	(1-12, 16-20), 21-28, 35-55, 57, 58, 60, 61, 65-67, 69	21, 22, 59, 61, 62, 66, 69, 70	—
VS	1, 5	3, 4	1-4, 6	1, 2, 6	—	—
VP	17, 51-55, 65, 72	3, 15, 20, (21), 22, 23, (24), 25-28,	1, 2	2, 4, (5), 6, (7), 8-11, (12), 13-15, (16),	22	—

		(29, 30-35, 36), 37-49, 51-58, (59), 60, 61, (62), 63-66, (67), 68-72		17-19, 46, 50	
PH	—	6	1, 2, 3, 4, 5, 6	4, 7	—
YS	21, 33	婦, 1-9, 12-18, 20, 21, 23, 24, 28-30, 34-38, 40-47, 49-58	婦, 1, 10-12, 14, 18, 19, 22, 23, 37, 39, 43-45, 48	15, 17-20, 24-27, 32, 33, 39, 43-45, 48, 54, 56	31, 36, 47, 59, 60
BS	12, 48, 120	20, 21, 29, 30, 45, 72, 73, 101, 103, 132, 144, 151	—	66, 98, 155, 163	1-19, 22-28, 31-65, 67-71, 73, 75-150, 152-154, 156-167
RA	I-47, 50, 51, 73, 74, 90, 99, II-14, 15, 18, IV-64, 88, 94-96	I-16, 25, 26, 35, 39, 42-45, 51-72, 76, 78, 79, 91-98, II-3, 5-13, 19-25, 48-69, 74, 87-89, IV-46-53, 56-65, V-3, 19, 21, 24, 25, 27, 48	I-36, 38, 46-50, 71, 87, II-4, IV-54, 55	I-27-33, 35-41, 52-54, 69, 80-90, 100, II-1, 2, 24, 25, III-68, 97, IV-56, 58-61, 63, 96, V-10	I-1-24, 34, 72, 76-79, II-19-47, 70-100, III-1-100, IV-1-45, 66-100, V-1-100
SL	3, 18, 108, 123	17, 42, 47, 48, 50, 51, 98, 108	66, 109-112	48, 49, 50, 58	1, 2, 4-48, 50-108, 113-123
MVim	1, 8	1, 5-7, 9-11, 13, 16, 18-20	3, 8	2-5, 8, 15, 17, 20	1, 12
LS	7, 8, 10-12	5, 13-16, 19-21, 23	2, 3, 6-11, 15, 16, 21, 22, 24	3, 4, 6, 9-11, 13-18, 20, 24-28	25-28
NS	7, 14, 16, 19-24	1, 4, 5, 8-14, 18, 24	6	1, 3, 14, 16, 17	9, 23, 25
AS	6, 23, 35, 39, 44, 57	7-9, 16, 19-23, 25-32, 36-39, 45-52, 54	1, 3, 4, 6, 11-16, 34, 35, 40, 43-45, 50	1-5, 10, 16-18, 24, 33, 52, 55	2, 53, 58, 59

<i>P</i> _s	1, 2, 9, 10	4, 5, 6, 7, 10, 11	—	3, 10	2, 8, 9	2, 11
<i>S</i> _s	1, 3, 5, 7, 9, 17	2, 4, 6, 8-18	5, 7	3, 18	3, 9, 10	1, 2, 16, 19
<i>N</i> _t	—	1, 2, 3, 5, 7, 8	—	4	8	6

18 / 4 / 2009.

2009

ISSN 0288-6472
Bukkyō shigaku kenkyū

佛敎史學研究

第51卷 第1号

〔論 文〕	徳川家康年忌行事と延暦寺……………曾根原 理 (1)
〔書 評〕	
大桑 斉・前田一郎編	
『羅山・貞徳「儒仏問答」註解と研究』……………平田 徳 (22)	
遠藤 一著	
『中世日本の仏敎とジェンダー —真宗敎団・肉食夫婦の坊守史論—』……………吉田 一彦 (31)	
小原 仁著	
『中世貴族社会と仏敎』……………中村 一晴 (40)	
〔新刊紹介〕	
大桑 斉著『戦国期宗敎思想史と蓮如』……………鍛代 敏雄 (54)	
彙 報	
〔論 文〕	
『禪定灯明論』に説かれる漸門派説について……………宮崎 泉 (1)	
ウイグル語訳『観弥勒上生兜率天経賛』について……………橘堂 晃一 (24)	
ナーガールジュナの諸著作……………津田 明雅 (47)	
—思想の考察と著作の分類の試み—	
佛敎史学関係出版目録 (2007)…………… (69)	

佛 敎 史 學 會

Vol. LXI, No.1 2008

THE BUKKYO SHIGAKU KENKYU (The Journal of the History of Buddhism)

CONTENTS

Articles	
SONEHARA Satoshi : The Anniversary Ceremony of Tokugawa Ieyasu in the Enryakuji Temple…………… (1)	
Book Reviews	
HIRATA Hajime : "A Study of Jyubutsu Mondou" by OKUJWA Hitoshi, MAEDA Ichikro (Razan Hayashi vs Teitoku Matsunaga of Argument Confucianism & Buddhism)…………… (22)	
YOSHIDA Kazuhiko : ENDOU Hajime "Buddhism of Gender Equality in Medieval Japan"…………… (31)	
NAKAMURA Issei : OBATA Hitoshi : "The Medieval Nobles Society and Buddhism"…………… (40)	
Introduction to New Books	
KITAI Toshio : OKUWA Hitoshi "History of Religion thought and Rennyō in the Sengoku Period"…………… (54)	
Announcements	
Articles	
MIYAZAKI Izumi : The Gradualist Doctrine in the <i>bSam gtan mng sgron</i> …………… (1)	
KITSUDO Koichi : Fragments of uighur Guannilesangshengdou shuaitianjingzan…………… (24)	
TSUDA Akimasa : On the writing of Nāgārjuna…………… (47)	
—Examination of his thought and experiment to classify the writings—	
A Catalogue of Publications relating to the History of Buddhism (2007) … (69)	

Published by
the Society of the History of Buddhism
Bukkyō Shigaku-kai, Kyoto.